おかげさまで十周年　室内楽の四季

クラシックの快楽

シリーズ　四季と世界の仲間たち

Produced by Yoshimi OSHIMA

主催／財団法人　桐生市市民文化事業団

おかげさまで十周年 室内楽の四季 2003

Produced by Yoshimi OSHIMA

10TH ANNIVERSARY 10

クラシックの快楽

シリーズ 四季と世界の仲間たち

冬 Winter

フィレンツェの仲間たち

～ミューズの街から

P·R·O·G·R·A·M

■ベートーヴェン：23の各国の歌より

Ludwig van Beethoven : Cinque canzoni popolari per soprano, violino, violoncello e pianoforte:
（1770-1827）

一羽の白い鳩 …… Bolero（スペインの歌）
元気を出せ、カティーナ …… Canzonetta Veneziana（ヴェネチアの歌）
乙女たちは森に行った …… Air russe（ロシアの歌）
カールちゃん、安らかにお眠り …… Ninna nanna svedese（スウェーデンの歌）
美しいミンカよ、別れねばならない … Air cosaque（ウクライナ、コサックの歌）

■ベートーヴェン：「美しいミンカよ」（コサックの歌）による変奏曲

Ludwig van Beethoven : Dieci variazione sull'Air cosaque per flauto e pianoforte In La minore op. 107

■ワイグル：「私が約束する前に」～歌劇「海賊」より

Josef Weigl : Terzetto "Pria che l'impegno magistral prenda" dall'opera L'amor marinaro
（1766-1846）

■ベートーヴェン：ピアノ三重奏「街の歌」より（「私が約束する前に」による変奏曲）

Ludwig van Beethoven : Variazioni su "Pria che l'impegno" per violino, violoncello e Pianoforte op. 11

♪ ♪ intermission ♪ ♪

■シューベルト：「しぼめる花」～美しき水車小屋の娘より

Franz Schubert : Trockne Blumen" tratto dal ciclo Die schöne Müllerin D.795-18
（1797-1828）

■シューベルト：「しぼめる花」による序奏と変奏曲 ホ短調

Franz Schubert : Variazioni in mi minore per pianoforte e flauto su "Trockne Blumen"D.802

■ミュラー：「私は仕立て屋カカドゥ」～歌劇「プラーグの姉妹達」より

Wenzel Müller : "Ich bin der Schneider Kakadu" dall'opera Le sorelle di Praga
（1767-1835）

■ベートーヴェン：カカドゥ変奏曲 ト長調

Ludwig van Beethoven : Trio 'Kakadu' per violino, violoncello e pianoforte op.121a

◇ムジカ・リチェルカータ　*MUSICA RICERCATA*

◇ドナテラ・デボリニ（ソプラノ）　*Donatella Debolini - Soprano*

◇ミヒャエル・シュトゥーヴェ（音楽監督・ヴァイオリン／ヴィオラ）　*Michael Stüve - Artistic leader Violin / Viola*

◇ロジャー・ロウ（チェロ）　*Roger Low - Viloncello*

◇フランチェスカ・カルドーネ（ピアノ）　*Francesca Cardone - Piano*

◇大嶋 義実（フルート）　*Yoshimi Oshima - Flauto*

日時／平成15年2月1日（土） 開演：午後7時～
on Saturday 1st February 2003 pm.7:00 -

会場／桐生市市民文化会館　小ホール
at Kiryu city Performing Arts Center, Small Hall

主催／財団法人 桐生市市民文化事業団

※やむを得ぬ事情により公演内容等に変更が生じる場合もありますのでご了承下さい。

プログラムノート
PROGRAM NOTE

主題と変奏
Tema e variazioni

器楽での変奏はルネッサンス時代から行われていた。声楽中心の教会音楽から、市民階級の器楽演奏の音楽へと拡がると同時に、聞き慣れたメロディ(主題)を繰り返し装飾変化させてゆく奏法(変奏・ヴァリエーション)が、残存する楽譜よりはるかに多く奏されていたことは簡単に想像できる。変奏の手法により楽器の特色も存分に生かせる訳だから、楽器の変遷とも密接に関連している。

ベートーヴェンはピアノの名手としても早くからウィーンで名高く、即興演奏の折の変奏の技巧は素晴らしいものであったらしい。独立した変奏曲も数多く書かれているが、交響曲、弦楽四重奏曲、ピアノソナタなど代表作の中に織り込まれた変奏曲形式は、ソナタ形式同様、楽曲をより格調高く深遠にした。

本日取り上げられるベートーヴェンの変奏曲は、巷に流行する歌曲(アリア、民謡、世俗歌曲など)、いわゆる「流行歌」を主題にしたもので、ベートーヴェンも世間を鑑みて流行を取り入れた訳だ。案の定、出版後の評判も上上、ただ彼自身はどうも満足してはいなかったようでもある。

しかし、その変奏テクニックは鮮やか、今日我々は楽しみながら聴くばかり…。本日はまずは原曲のモトウタ(今も聞かれるものもあれば、全く廃れてしまった曲もある。)をソプラノ独唱で、次にそれを主題にした器楽の変奏曲を比較しながら聴き、19世紀の音楽生活に思いを馳せてみたい。

● ベートーヴェン：23の各国の歌 WoO.158a
● ベートーヴェン：「美しいミンカよ」(コサックの歌)による変奏曲

ルードヴィッヒ・ファン・ベートーヴェン(1770〜1827) といえば9曲の交響曲、16曲の弦楽四重奏曲、32曲のピアノソナタが、彼の全創作を支える3本の巨大な柱といわれている。が、実は民謡の編曲はなんと170曲も行っていた。イギリスの出版商ジョージ・トムソンは、故郷スコットランドをはじめ、アイルランド、ウェールズ地方の民謡蒐集と保存に力を入れており、1809年ベートーヴェンにも蒐集した民謡の編曲を依頼した。120曲ものアイルランド民謡、スコットランド民謡(「蛍の光」も含まれている)、イギリス民謡は、ヴァイオリン、チェロ、ピアノの伴奏を伴った民謡集として次々と出版された。 大作曲家の民謡編曲集は、後世に残る芸術的な大曲よりも親しまれ、この仕事がベートーヴェンの懐を随分と潤わせたようだ。以後、興味を持ったのか、柳の下を目論んだのかは不明だが、自発的にドイツ民謡はもとより、ロシア、ポルトガル、デンマーク、チロル、ポーランド、ウクライナ、スウェーデン、スペイン、ヴェネツィア民謡など諸国の民謡を編曲した。

本日歌われる五曲は、当時は結局出版されずに終わった(1941年に出版)各国の民謡からの抜粋で、ピアノ三重奏の伴奏のついた愛らしい歌ばかりである。

次にフルートとピアノで演奏されるのは、5曲目(民謡曲集では第16曲)のロシア民謡「美しいミンカ(Schöne Minka)」の主題による変奏曲。この歌は当時からかなりポピュラーだったようで、フンメルやウェーバーも同じメロディで変奏曲を書いている。原題「10の主題と変奏」は、十曲の民謡と各変奏曲からなる曲集で、ピアノ曲にフルート、またはヴァイオリンの助奏自由という、ピアノ変奏曲の変形版。民謡編曲と同時期1818年に作曲、1820年に出版された。当時、貴族ばかりでなく市民階級の家庭にも普及してきたピアノのための小品集的な意味合いが強い。

● ワイグル：「私が約束する前に」〜歌劇「海賊」より
● ベートーヴェン：ピアノ三重奏 変ロ長調「街の歌」(「私が約束する前に」による変奏曲)

今では殆ど無名、公演されることも無い、ベートーヴェンと同時代の作曲家ヨゼフ・ヴァイグル(1766〜1846)のオペラ「海賊」が1797年10月ウィーンのブルク劇場で初演。中で歌われる三重唱「私が約束する前に」(Pria che l'impegno magistral prenda) はまたたく間に大流行した。「仕事をするって約束するから、まずは何か食べ物を」と歌われる陽気で軽快なメロディは、ウィーンの街の至る所で口ずさまれていたという。

オペラ初演から一ヵ月後、あのベートーヴェンの「みんなが知っているあの曲」が三楽章に登場する「ピアノ三重奏 第4番 変ロ長調 作品11」を聞いた人々は、彼の茶目っ気を大いに喜んだ。このトリオが「街の歌」あるいは「俗歌」と呼ばれるようになった由縁で、彼自身は、歌の流行が治まったら三楽章を差し替えるつもりもあったらしい。オペラは以後30年ほど各地の劇場でも取り上げられ、フンメルやパガニーニも同じメロディを主題に変奏曲を作曲している。

野心的な音楽ゆえに当時の聴衆から眉を顰められることも多かったベートーヴェンの初期作品の中では、作曲当時から高い評価を得た珍しい作品ともいえるだろう。ピアノ・クラリネット・

解説／大嶋義実

チェロのために書かれたが、今日ではクラリネットの部分はヴァイオリンで演奏されることも多い。全体を通じて精力的ながら、若いベートーヴェン独特の端々しい感性も随所に伺われる。

第1楽章と第2楽章はソナタ形式で、主題と9つの変奏を持つ第3楽章では、ピアニストとしても高く評価されていたベートーヴェンの面目躍如たるものがある。各変奏曲同士の性格対比、あるいはピアノと他の2つの楽器との対照の妙などには、後年のベートーヴェンの広大なる音楽世界の片鱗を垣間見ることができる。

●シューベルト：「しぼめる花」～美しき水車小屋の娘より
●シューベルト：「しぼめる花」による序奏と変奏

歌曲王フランツ・シューベルト（1797～1828）は短い生涯でおよそ700点余の作品を残した。その大多数は歌曲で、「魔王」「野ばら」などゲーテの詩が特に有名。ドイツ・ロマン派の詩人ウィルヘルム・ミュラーの詩に基いた連作歌曲集は1823年「美しき水車小屋の娘」、1827年「冬の旅」がある。彼が少年時代から尊敬していたベートーヴェン死去のショックからか、以前からの病も悪化、楽聖の死の翌年（つまり「冬の旅」作曲の翌年）わずか31歳の若さで亡くなった。

「しぼめる花」(Trockne　Blumen)は歌曲集「美しき水車小屋の娘」の第18曲目。20曲からなる歌曲集は「さすらいの旅に出た粉引き職人の若者が、美しい水車屋の娘と出会い恋が始まる。しかし娘は狩人に心を奪われてしまう。若者は失恋に心を痛め、最後にみずから小川に身を投げる。」という悲しい恋物語。「しぼめる花」も葬送行進曲の伴奏にのった沈んださびしい曲。

歌詞大意「彼女がくれた花を私と一緒に墓へ入れてもらおう。翌春、野に花が咲き乱れたころ、私と色あせ萎れた花は墓の中。彼女は私を思い出すだろうか。」

澄んだ悲しさが深く美しく、歌曲集の中でも当時からとりわけ親しまれていた「しぼめる花」をテーマに翌年1月、シューベルトは「フルートとピアノによる序奏と変奏」を書き上げた。友人達と内輪で音楽に興ずる集いの主役でもあった彼は、その仲間のために作曲することが多かった。この曲もおそらく、シューベルティアーデと呼ばれるその集いに参加していたフルーティスト、フェルディナンド・ボーグナーのために書かれたと推測されている。

重い内容を持った序奏に続いて、主題が奏され、続く変奏では、非常に有機的に各曲が結び合わされ、フルート、ピアノ共に名技を駆使しつつ、「しぼめる花」 に託された少年の心を描きつくす。華美に変奏する表層的な技巧曲ではなく、内容の深い作品となっている。

しかし、シューベルトの死後22年、1850年に出版された時には、すでに人々はこの曲に対して理解が薄かったと伝えられている。

●ミュラー：「私は仕立て屋カカドゥ」～歌劇「プラーグの姉妹達」より
●ベートーヴェン：カカドゥ変奏曲 ト長調 作品121a

ヴェンツェル・ミュラー（1767～1835）はチェコのトゥルノフ出身、ウィーンのレオポルトシュタット劇場付の楽長兼作曲家。ヘンスラーやペリネなど当時一級の喜劇台本作家と組んで、世相を風刺した物語と、チロル民謡など歌いやすいメロディを盛り込んだ大道芸的な舞台（オペラ、バレー、パントマイム）は次々とヒットを飛ばし、時代の寵児であった。「魔笛」を成功させたシカネーダー率いるヴィーデン劇場と張り合い、新しい刺激を求めるウィーンッ子のために生み出された舞台は250演目、今は殆どが忘れ去られてしまった。とはいえ、このスタイルが、のちのちウィーン独特のオペレッタに、ロンドンに渡ってミュージカルに、そしてブロードウェイへと発展していった。

1794年にウィーンで初演された歌劇（ジンクシュピール）「プラーグの姉妹たち」も人気爆発、その中の「私は仕立て屋カカドゥ」（Ich bin der Schneider Kakadu）は、モーツァルトの「魔笛」のパパゲーノのアリア「恋人か女房か」をパロディ化しているようにも思える。人々は喜んで「仕立て屋カカドゥは、はさみジョキジョキ。アイロンマンは、帽子のてっぺんからスカートのすそまでを大冒険」とこのメロディを口ずさんだ。

ベートーヴェンは以前からこの歌をピアノ三重奏で変奏曲にする構想はあったようだが、実際に作曲された年ははっきりしていない。1803年、1816年、1823年説がある。このオペラが定番劇として1828年までに130回上演された記録があるので、流行をみながらどこへ売り込もうかと書き直しをしていたのかもしれない。出版は1824年。

曲はト短調のアダージオで始まる重苦しい序奏部、ユーモアたっぷりのト長調の主題、続いてピアノ、ヴァイオリン、チェロと軽やかに変奏を始め、シンコペーションやカノンの手法を凝らし休みなく移行する10の変奏は飽きさせるところが無い。最後はト短調のフガートとト長調アレグレットで華麗にしめくくる。ベートーヴェンは晩年とくに対位法的書法と変奏曲の形式を好んだが、この曲にも特有のこまやかな美しさがちりばめられている。

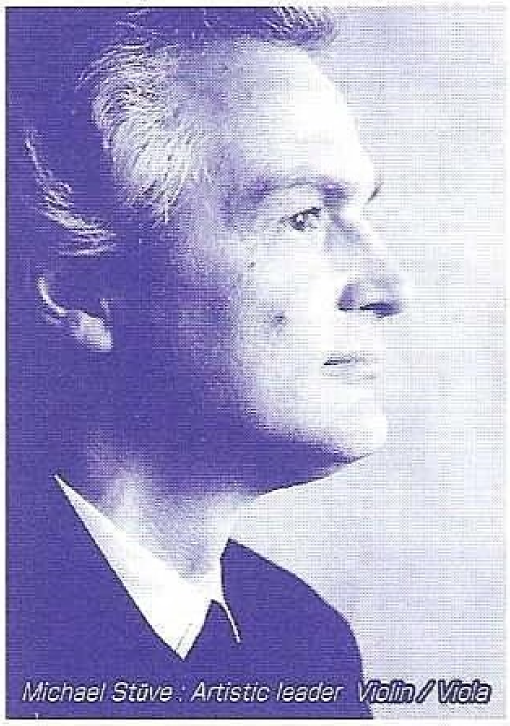
Donatella Debolini Soprano

ドナテラ・デボリニ（ソプラノ）
Donatella Debolini

フィレンツェ生まれ、ケルビーニ音楽院修了。古典歌曲および現代歌曲をリリアナ・ポリ、スザナ・ダンコ、ユリア・ハマリに師事、ヴァレンチノ・ブッキ現代歌曲コンクール入賞、コネリャーノ声楽コンクール優勝など入賞歴も数多い。ヨーロッパ各地でコンサートを重ね、オペラでは、モンテヴェルディの「オルフェオ」「ポッペアの戴冠」「ユリシーズの故国への帰還」モーツァルトの「フィガロの結婚」などで重要な役を担う。ＣＤ録音も多く、バイエルン放送、オーストリア放送でも演奏が取り上げられた。フィレンツェ・フィエーゾレ音楽院およびボローニャ・マルティーニ音楽院の教授を務める。イタリアを代表するソプラノ。

ミヒャエル・シュトゥーヴェ（音楽監督・ヴァイオリン／ヴィオラ）
Michael Stüve

ロンドンとウィーンで音楽と社会科学を学ぶ。ヴァイオリンをエドワルド・メルクス教授に師事。1974—86年ウィーンにて、フォルクスオパー、ウィーンフィルでヴァイオンとヴィオラ、カペラ・アカデミカ・ウィーンで、古楽奏者として活躍。1987年フィレンツェに居を移し、フィレンツェ五月祝祭歌劇場でヴァイオリン奏者を務める傍ら、1987年ムジカリチェルカータを設立、ヨーロッパ連合政府文化省の支援を得、古代ギリシャ音楽から現代音楽まで西洋音楽史の流れにのっとった再現を試みる。演奏家のみならず作曲家、指揮者、研究者として著名な音楽祭で活躍している。


Michael Stüve : Artistic leader Violin / Viola

Roger Low Cello

ロジャー・ロウ（チェロ）
Roger Low

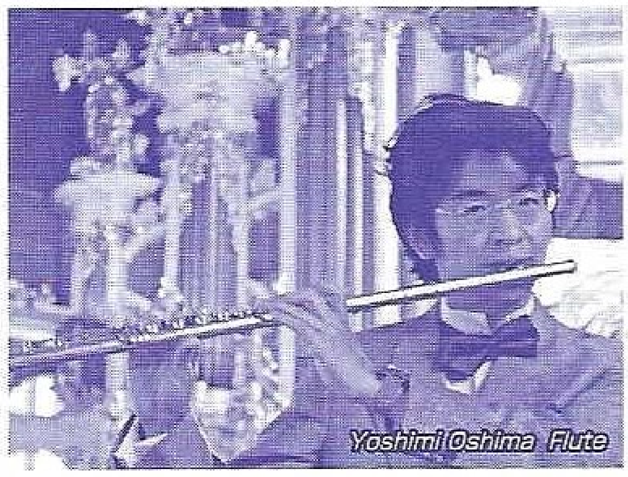
アメリカ生まれ。ボストン大学でチェロを学んだ後、ジュリアード音楽院修了。1977年カーネギーホールでソロ・デビュー、数々のコンクールで入賞、ニューヨークで活動を開始する。オルフェウス室内合奏団、オメガアンサンブル、サンアントニオ・チェンバープレイヤーズなどと共演。フィレンツェに居を移してからは、フィレンツェ五月祝祭歌劇場の首席チェロ奏者を務める傍ら、室内楽奏者としてソリスト・ディ・フィレンツェ、ムジカリチェルカータ、ボロディン四重奏団などと共演を重ねている。

フランチェスカ・カルドーネ（ピアノ）

Francesca Cardone

イタリア生まれ。フィレンツェ・ケルビーニ音楽院在学中、フランツ・リストピアノコンクール、ローマ89コンクール、スクリャービンコンクールなど数々の国際コンクールで入賞、渡米し、アメリカ・ダラスで芸術家認証ディプロマ、修士課程を取得、ダラス音楽家連盟のメンバーに認定される。その後ローマ・サンタチェチリア音楽院、ザルツブルグ・モーツァルテウム音楽院でも研鑚を積む。

ローマフィルハーモニーとの協演、リサイタルなどソロ奏者として活動するだけではなく、室内楽奏者としても多くのコンサートを重ね、ＣＤ録音も多い。



大嶋 義実（フルート）

Yoshimi Oshima

プラハ放送交響楽団首席フルート奏者、群馬交響楽団第一フルート奏者を経て、現在京都市立芸術大学助教授。京都市芸大卒業後、ウィーン国立音楽大学を最優秀を得て卒業。日本音楽コンクール、マリア・カナルス国際コンクール、日本管打楽器コンクール他、内外の著名コンクールに多数入賞入選。ソリストとしてロンドン、ウィーン、プラハ等、毎年ヨーロッパより招かれ、リサイタルを行うほか、プラハ交響楽団、スロヴァキア室内合奏団等、数多くのオーケストラと協演、各地の音楽祭に出演。1998年日本人フルーティストとして初の『プラハの春国際音楽祭』ソロ出演をはじめ、2000年はベルギー、ドイツ、チェコ、イタリア、ポーランドと五ヶ国10都市以上にわたる公演を行っている。桐生市市民文化事業団音楽アドヴァイザー、京都市芸術新人賞受賞。8枚のソロＣＤをリリース。

お願い　・公演中、アラーム時計やポケットベル、携帯電話の呼び出し音が鳴らぬようセットしてください。
・場内での写真撮影、ビデオ録画及び録音はご遠慮ください。